

第87回 定例研究会 報告

日時:2024年3月25日(月)14:00-16:30  
場所:国立音楽大学 新1号館 合唱スタジオ(N-128)  
およびオンライン  
企画・講演・演奏:青柳 いづみこ(大阪音楽大学名誉教授)  
司会:中田朱美(国立音楽大学)  
内容:演奏付き講演

パリのサロンで生まれた音楽  
——19世紀末から1920年代まで——

共演:飯島 聡史(国立音楽大学大学院助教)  
資料作成・発表補佐:石野 香奈子(明治学院大学大学院)

【講演要旨】

本講演は、コンクールという制度のなかった19世紀から20世紀初頭、パリの音楽サロンの女主人たちが果たした芸術支援活動への貢献とその意義について光を当てるものである。彼女たちはそのたぐいまれな鑑識眼によって新しい才能を発掘し、世に出るチャンスを与えた。

講演者は2023年7月に上梓した『パリの音楽サロン ベルエポックから狂乱の時代まで』(岩波新書)で、1870年代から1920年代までのパリを舞台に、フォーレから6人組までの活動を支援し、新しい芸術運動を推進したサロンとそのオーナーに焦点を当て、彼ら、彼女たちなくしては生まれなかった作品やその誕生背景について詳解した。ひと口にサロンと言っても、上流階級やブルジョワのサロンから、小劇場、書店や画廊などのスペース、文学者や作曲家、演奏家の自宅など多岐にわたる。

本講演ではそのサロンの中から、ディアギレフ率いるバレエ・リュスを支援したグレフール伯爵夫人、サティやストラヴィンスキーに委嘱したポリニャック大公妃、1894年から1927年に亘って詳細な日記を残したサン＝マルソー夫人のサロン、6人組集結のきっかけとなったモンパルナスのユイガンス音楽堂、ジャーヌ・バトリが音楽監督を務めた時代のヴィユ・コロンビエ座、コクトーと6人組の面々が集ったミヨーの土曜会に注目する。さらに関連作品の一部を演奏しながら、新しい音楽の誕生にあたってサロンが果たした役割についてあらためて考察する。

音楽学者ミアム・シメーヌ Myriam Chimène も『第3帝政期におけるメセナと音楽家たち:パリのサロンからコン

サートまで Mécénat musical sous la ille République』(Fayard, 2004)において、サロンの推進者(メセナたち)が音楽家に演奏機会を与え、あるときは被献呈者や楽譜の予約者に、またあるときは公的な公演の主催者になった様子を語っている。彼らがいかに物心両面で演奏家を支えたかは、音楽家たちの伝記、回想、証言が伝えている。ベル・エポック期に芸術文化の存在意義が不動のものとなった背景には、間違いなくこうした彼らの活動があった。

講演に付随する演奏の際、4手連弾と2台ピアノにおける共演者は、2023年度に国立音楽大学で博士号を取得された同大学助教、飯島聡史氏である。

〔演奏曲目〕 ☆青柳いづみこ ★飯島聡史

1. グレフール伯爵夫人のサロンから  
ガブリエル・フォーレ:バヴァーヌ op.50(1886)(ベンフェルトによる4手連弾版) [★☆]
2. マドレーヌ・ルメールのサロンから  
レイナルド・アーン:画家の肖像 プルーストの詩による(1907)より (2)パウルス・ポツテル (3)アントニー・ヴァン・ダイク [☆]
3. サン＝マルソー夫人のサロンから  
フォーレ=メサジェ:パイロイトの思い出〜カドリール風幻想曲 ワーグナー『ニーベルングの指輪』のテーマによる [連弾 ★☆]
4. ポリニャック大公妃のサロンから  
エリック・サティ:交響的ドラマ『ソクラテス』(1918)第1部 ソクラテスの肖像(ジョン・ケージによる2台ピアノ版) [☆★]
5. ユイガンス音楽堂から  
ジェルメーヌ・タイユフェール:野外遊戯 から 第1曲 ティルリタンテーヌ [2台ピアノ ★☆]
6. ヴィユ・コロンビエ座から  
ルイ・デュレ:カリヨン(1916) [連弾 ☆★]
7. ミヨーの土曜会から  
ジョルジュ・オーリック:さらばニューヨーク!(1920)(ダリウス・ミヨーによる4手連弾版) [☆★]

【傍聴記】(成田麗奈)

本講演は、2023年7月に刊行された青柳氏の『パリの音楽サロン』(岩波新書)に基づく演奏付き講演である。ただし、本書の内容をそのまま辿るものではなく、過去のレクチャーコンサートの成果も活かされて装いをあらたに構成されたものである。

グレフール伯爵夫人は貧しい貴族の出身で、プルースト『失われた時を求めて』のゲルマント夫人のモデルの

一人とも言われる人物である。彼女のサロンの参加者リストには、ティボー、コルトー、A. ルービンシュタインほか、数多くの音楽家が名を連ね、ブルーストも彼女のサロンの様子を詳細に綴っている(『ブルースト全集 15』)。フォーレは、彼女のサロンの出演者や演目の決定を委ねられていたという。彼の《パヴァーヌ》管弦楽版(1887)はグレジュール伯爵夫人に献呈され、彼女の勧めでモンテスキュー伯爵の詩をつけた合唱曲版(1887)も作られたほか、1891年ブローニュの森で開催された祝宴では、フェット・ギヤラント風のパレエ版が披露されたという。

ルメール夫人は『失われた時を求めて』のヴェルデュラン夫人のモデルとも言われ、上流階級ではなく、いわゆるブルジョワであり、「薔薇の花の画家」としても知られた。ブルジョワのサロンの中では最も華々しく、人の出入りも多かったそうで、ブルーストとR. アーンは彼女のサロンで出会い、親交を深めた。ブルーストの詩とアーンのピアノ独奏曲からなる《画家の肖像》が1895年に初演されたのも、ルメール夫人のサロンであった(本講演ではピアノ独奏曲の演奏のみ)。

サン＝マルソー夫人は、自身もピアノや歌に秀で、フォーレの《優しき歌》、ブッチーニの《マノン・レスコー》を作曲家自身のピアノ伴奏により歌ったという。フォーレは寵愛されていた作曲家の一人で、いたずら好きを発揮して右手と左手で異なる調で《ファウスト・ワルツ》を弾いてみせたり、友人のメサジェとの四手連弾で奇抜な転調を競い合ったりしていたようだ。こうした悪ふざけの締めくくりに演奏されたのが、ヴァーグナーのライトモチーフを用いたパロディ風のカドリューで、《パイロイトの思い出》(1888)もその一例である。

シンガー・ミシンの創設者の娘として莫大な財産を受け継ぎ、エドモンとの結婚(再婚)により上流階級の一員ともなったポリニャック大公妃は、サロンの開催のみならず、より開かれた公的な場での音楽活動を支援にも尽力し、作品の委嘱や新作を多く取り上げる演奏会の主催などを精力的に行なった人物である。酒場のピアノ弾きにすぎなかったサティの才能を見出し、のちに《ソクラテス》(1918)を委嘱したのも彼女である。

後半は、人物よりも人々が集った場に焦点が当てられたこともあり、ポリニャック大公妃の説明もやや足早で、ジャーヌ・バトリに関してはコロンビエ劇場での活動について簡潔に言及された程度であり、両名とも関わりがあり、サル・ユイガンズやコロンビエ劇場、土曜会で注目を集める存在となっていたフランス六人組の紹介が中心であった(本講演では六名のうち、比較的演奏会で取り上げられる機会の少ない三名の初期作品が演奏された)。『パリの音楽サロン』ではポリニャック大公妃とバトリに一章ずつ割かれていること、主要先行研究のLaurent et al. (1984)においてバトリが当時の「前衛音楽」の上演に果たした役割の重要性が詳述されていることは付言しておきたい。

短時間に演奏付きで19世紀後半から20世紀初頭という長期間を扱い、五人のメセナを取り上げることは、ともすれば事例の羅列となり焦点がぼやけてしまいかねない。だが、演奏曲目という軸に支えられ、さまざまなケー

スを横断的に概観したことによって、それぞれの女主人とそのサロンの特質がより明確になったと思われる。また、サロンが開かれた場に関するもちょうど前半と後半で、パリの「右岸から左岸へ」という構図が確認できたほか、パリと郊外・地方の別荘地といった地理的な広がり、邸宅からアトリエ、劇場、アパートマンの一室など開催場所の差異についても臨場感を持つことができた。

質疑応答において会場からも指摘があった通り、本講演は、従来等閑視されがちであったサロン音楽研究の再評価や活性化にとって意義あるものと言えるだろう。また、講演ではいわゆる「フランス人作曲家」に焦点が当てられていたが、質疑では、外国人音楽家たちの存在についても質問があり、パレエ・リュスをはじめ、外国人音楽家たちがパリのサロンに出入りしたり劇場・コンサート会場で活躍したりする際にサロン主催者たちの果たした役割、その背景に厳然として存在する階級格差などについて説明があった。

本講演は、年度末とはいえ平日の「マチネ」開催であったが、参加者は会場とオンラインともに盛況であった。非会員の参加も多く、学会の活動がより多くの人々に開かれ周知される機会としても意義があったであろう。

## 日本音楽学会東日本支部通信 第87号

2024年5月10日発行

発行：日本音楽学会東日本支部

<http://www.musicology-japan.org/east/index.html>

日本音楽学会東日本支部事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3丁目3番地3号 生光ビル303

Tel & Fax : 03-3288-5616

E-Mail : [higashi@musicology-japan.org](mailto:higashi@musicology-japan.org)